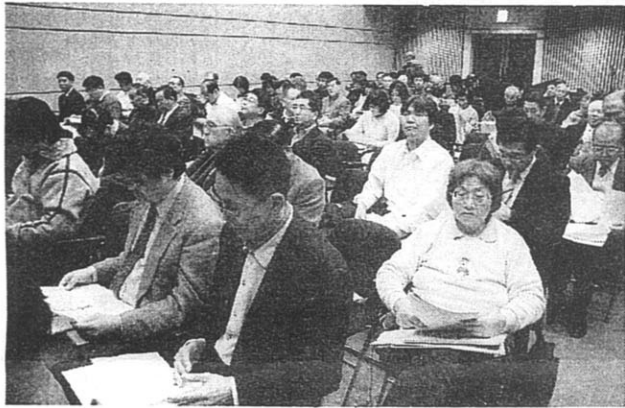


# 東京大学社会科学研究所

# 釜石に希望あり



調査報告  
プロジェクト  
シンポジウムで

## 研究者らメッセー ジ発信

## 問われる真価に望みの種

「希望プロジェクト」の調査を釜石市で進めている東京大学社会科学研究所は、日、「釜石」に希望はあるかをテーマにしたシンポジウムを市民文化会館で開いた。結論から言えば、釜石に希望はあるというプロジェクトリーダーの玄田有史助教が、「ものづくりのまち」として歩んできた釜石の製造業や新産業の動き、新しい都市イメージ、経済の活性化などについて調査した国内一流の研究者らが、釜石市民に対してさまざまな希望のメッセージを発信。会場では「希望が実感できた」との声も聞かれた。

### 「希望が実感できた」の声も

「釜石の希望が、どんな形に生まれつつあるのかを知ってもらい、みんなに地域誇りや志を持ってもらいたい」「希望学」などの著書もある玄田助教は、シンポジウムをこう切り出した。

助教が「地理的に限られた空間の中で、鉄の歴史とともに集積と衰退を繰り返してきた企業城下町の新しい希望の芽をさぐりたい」と調査の全体像を狙いを説明した。

製造業の動きに着目した中村圭介教授は「この10年余りの間に大きな構造転換があり、釜石は鉄のまちではなくなった」と指摘。「釜石製鉄所によって整備されたインフラや良質な労働力がある。これを生かしたネットワークづくりが今後の課題だ」と述べた。

地元企業の自主活動を調べた龍谷大学の辻田素子助教は、地元企業の挑戦は高く評価しつつも、進出企業との連携不足を指摘。「雇用創出はある程度達成された」としつつも、「今後はビジョンの共有やネットワーク化が非常に重要で、支援

⑤「釜石に希望はあるか」をテーマにしたシンポジウム⑥会場には市民ら140人余りが詰め掛け、満杯となった

のフロアネットワークの出現が求められる」と話した。

グリーンツーリズム運動に着目した大堀研・機関研究員は「工業と自然との位置づけが明確ではなく、釜石は新しい都市像を見いだしていない」と指摘。公害から環境のまちへと脱皮を模索する熊本県水俣市の取り組みを紹介しながら「工場の中にグリーンツーリズムを取り込むの試みは全国に発信する文化になり得るのではないか」と提言した。

釜石の経済活性化を考えた橋川武郎教授は「希望は十分あるのに、互いにつながっていない」と指摘。「それぞれが立派な成果を挙げているのが落として」したうえで、「第一級の自然の中で第一級のものをづくりをやってきた釜石のストーリーを描ければ未来は広がる。釜石は日本の縮図。汗が報われるまち。そういう話を花を咲かせてほしい」とエールを送った。

これらの中継報告に対し、岩手大学の竹村祥子助教は「まずい」と思うことが多かった」と感想を話した。市民代表の立場でシンポジウムに加わった遊佐俊一さん(福島屋専務)は「釜石には全国に誇れるオンリーワンの資源がいっぱいあることに気が付かされた。こ

れからは自信を持ってPRしていきたい」とコメントした。

中間報告の中で「企業誘致は雇用優先で、戦略がなかったのでは」と指摘された佐々隆裕さん(釜石市産業政策課長)は「これまでは戦略的誘致など不可能に近かった」と反論。1年間に延べ1700社に足を運ぶなどの地道な取り組みを紹介し、今は戦略を描ける余裕も出てきた。いい条件の話がたくさんあり、希望もいっぱいある」と話した。

同プロジェクトは、05年度から08年度まで同研究所が取り組んでいる「希望の社会科学的研究」の一環で企画した。近代以降の日本社会で「希望」の社会的位相がどのように変遷したかを、法学、経済学、歴史学、社会学などをさまざまな角度から解明し、現代社会における「希望」のあり方を考えるのが狙い。

東大社会科学研究所のスタッフの3分の2がかかわる大規模プロジェクトで、龍谷大学や法政大学などを含む30人ほどの研究者が5つの課題に分かれ、連携を取りながら進めている。昨年7月の予備調査に続き、9月には本調査を実施。延べ300人にインタビューしたほか、市内4高校のOBなど約2000人を対

象にアンケート調査も行った。

同研究所の小森田秋夫所長は「調査には真剣に取り組んでいる。釜石市民と当研究所の真価がともに問われるからだ」とも。調査に協力した岩崎昭三さん(民宿宝来館代表)は「最初はバカにされていると思ったが、希望が一つの旗となり、みんなが集まる雰囲気が出てきた」と話した。